

## ■シューベルト／交響曲第8（9）番八長調 D. 944「グレート」

シューベルトの交響曲第8（9）番も前述のとおり、節度のある形式を好んできた作曲家のイメージとは異なっている。シューマンが新音楽雑誌の中で「天国的な長さ」と評した言葉は有名だが、実際、50分から60分を要する演奏時間は確かに破格だった。1824年に初演されたベートーヴェンの「第9」が1時間10分から15分ほどかかる大作で、その後の交響曲作曲家たちと同じく、シューベルトがこの「第9」の偉業を意識していたことは容易に想像できる。さらにシューマンは「初めは楽器編成の新しさ、形式の雄大さ、感情生活の魅惑的な交代、われわれの運び込まれた全く新しい世界などの姿があまりにもはでなので、ちょうど新しいものを初めて見た時のように、混乱する人もあるかも知れないが、そんな時でも、何とというか、ちょうど魔法使いのおもしろい話をきいたあのような楽しい気持ちが残る」と表現した。長さといい、輝かしさといい、最晩年の「グレート」はシューベルトがそれまでの殻をやぶろうとした曲であることを、みごとに言いあてている。そして、ここに漲る明るさには、どこか死の影も巣くっているようだ。

公式の全曲初演はシューベルトの死後11年を経て、1839年3月21日、メンデルスゾーンがライプツィヒ・ゲヴァントハウス・オーケストラを指揮して行われた。シューベルトの兄弟が保管していた楽譜の中から、シューマンが楽譜を発見したのがきっかけである。ただし「生前、作曲家自身が聴くことのできなかつた交響曲」というレッテルは正確ではない。じつは楽友協会の領収書から、この交響曲が作曲されてまもなく写譜が行なわれたことがわかっていて、1825年の春から26年の冬までの間に作曲されたのち、27年もしくは28年にウィーン楽友協会での初見のリハーサルでシューベルトはこの曲を耳にした。また、シューベルトの死後も28年の追悼演奏会のほか、36年4月17日にウィーンで終楽章が単独で演奏されたことがわかっている。

「未完成」と同じくトロンボーン3本を含む2管編成で、慣例にならった4楽章構成となっている。とくにホルンの扱い方が特徴的な第1楽章アレグロ・マ・ノン・トロツポは、アンダンテの序奏で始まる。遥かなる響きをもつ序奏のホルンは心地よいが、その旋律は素朴さの中に不規則な形態を隠している。ソナタ形式の主部では展開部が充実し、遠隔調へと転調する。また、トロンボーンの色彩的な用法が印象深い。第2楽章アンダンテ・コン・モートでは、歌曲作曲家としてのシューベルトの才能を思わせる繊細で抒情味ゆたかな主題が際立つ。メランコリックなオーボエの旋律による第1部、楽器間の応答がおもしろい第2部、第1部の旋律が回帰する第3部、第2部の再現となる第4部、そしてオーボエの主題が再現される第5部からなる。第3楽章アレグロ・ヴィヴァーチェはスケルツォ楽章で、主部の主題は弦楽器とオーボエの応答がおもしろい。トリオはドイツ舞曲風。シューマンの歌曲集《詩人の恋》の第2曲を想起させる。第4楽章アレグロ・ヴィヴァーチェは輝かしいフィナーレ。ソナタ形式の第1主題は長調と短調の間を揺れ動く。展開部の後半、ベートーヴェンの「歓喜の歌」と類似した楽想がよぎる。最後は快活なコーダで結ばれる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。